



- 話に遊び 輪を結び 座に集う -

第八回 民話ゆわ座 資料

あの日から10年が経って

〈災害について考える〉

— もくじ —

【地震】	一.	「井戸に落ちた地震」	話・煤原村男さん（大正八年生） 栗原市栗駒	1 頁
	二.	「福島のマンゼロク」	話・島山平作さん（明治三十六年生） 気仙沼市階上 話・村田喜膳さん（明治三十八年生） 気仙沼市本吉町	4 頁
【津波】	三.	「白大丸・黒大丸」 しろだいまる くろだいまる	話・関山ちよさん（大正六年生） 多賀城市八幡	5 頁
	四.	「末の松山 波越さじとは」	話・岩崎としゑさん（明治四十年生） 牡鹿郡女川町	9 頁
	五.	「三陸の大津波」	話・山内郁さん（昭和四年生） 本吉郡南三陸町	10 頁
【飢饉】	六.	「おはつとわらし」	話・山内泰助さん（明治四十三年生） 本吉郡南三陸町	13 頁
	七.	「膳の湯」 かつしゃ	話・山内郁さん（昭和四年生） 本吉郡南三陸町	14 頁
	八.	「騒がしいしし頭」 かつしゃ	話・山内郁さん（昭和四年生） 本吉郡南三陸町	16 頁
【疫病】	九.	「どすになった娘と猫」	話・佐々木健さん（昭和十二年生） 宮城郡利府町	17 頁
【水害】	十.	「川面土手の人柱」 かわづら	話・山内郁さん（昭和四年生） 本吉郡南三陸町	18 頁
	十一.	「橋かけ鬼六」 おにろく	話・佐藤玲子さん（昭和六年生） 栗原市一迫	20 頁
【旱魃】	十二.	「天から落ちた雷小僧」 かんばつ	話・高橋市雄さん（明治四十二年生） 角田市小山	23 頁

【地震】

一、井戸に落ちた地震

むがあす、むがす。

あるところに野郎^{やろ}っこがいたんだ。その野郎^{やろ}っこ

へなんとがすて、海のむこうさ行ってみでえ

と思つてやあ、舟漕^こいで出かけていったんだ。

家を出る時^{とき}、母^がやんから、

「餓鬼^{がき}（子ども）、餓鬼。これ、遠ぐさ行くのだから、こい

づ持つて行け。大事な時^{とき}だけ出すてみるよ」

つて、形見の品物をもらつて行つたんだ。

そうすて、海を越えて、向こうの島に着いたれば、山の

中に一軒家があつて、そこさ、

「一晩、泊めでけらいん」

つて、お願^{ねげ}えしたんだ。

かあちゃんみでえな女^{おなご}の人がいで、

「ああ、良^いがす。ほんでえ、泊まらいん」

つて言つて、野郎^{やろ}っこ、泊めらつた。

すたつけ、夜中になつたつけ、ゆらゆらゆらつと家が揺^ゆ

れるんだ。野郎^{やろ}っこ、たまげてやあ、

「おつかねえごど、なんだか、家、たまげて揺れる」

つて語^{かた}つたんだ。そすたつけ、

「ああ、おら家^いの親父^{おやん}つあん、山から木を背負^{しよ}つて出てくるごだ」

つて語^{かた}るんだ。

へああ、そうか。山で木伐つてくんのに、こだに揺れるのがやあ

つて思つてだれば、そのうちに、ますます揺れで、ぐらぐらーつと揺れ出して、立ってらんねえんだ。

たまげて縮^{つっ}こまつたれば、かあちゃんが見にきて、

「たまげたがあ」

つて語^{かた}つかあ、

「おつかなくて、おつかなくてわがんねえわやあ」

って震えったんだと。

「いま、おら家の親父つあん、木小屋さ木い下ろしたとごだ」

「なんだって、たまげて揺れるんだべ」

「ほだって、おら家の親父つあん、地震だからっしゃ」

それ聞いで、野郎っこ、

へほんだから、木を背負って歩くばりでも、こだに揺れるんだな。こりや、とつてもおつかねえ。泊まるどごでねえ」と思つて、逃げるどこしたんだと。

そすたつけ、地震の親父つあま、帰つてきて、野郎っこどこ眺めて、かあちゃんさ語つたんだと。

「ああ、いい野郎っこだ。家さ置いで仕事させつぺ」

ところが、野郎っこのほうは、そのすきに家から出て、逃げた、逃げた。海のほうさ向かつて逃げたんだと。

「あんだ、あんまり揺るから、たまげて逃げでつた」

「んで、追っかげなくてねえ」

親父つあん、追っかげだづもの。

地震が追っかげんのだから、歩けば歩くくれえ、前半分、

後ろ半分、揺れるから、野郎っこは走るにも走らんねえ。

前さ進んだと思えば、こんだあ、逆もどりしたり、地震の親父つあんとあいだは狭まって、追っつかれそうになつたんだと。

そごさ、乗つてきた舟あつたから、野郎っこ、どんがり乗つたどやあ。そすたつけ、地震も別な舟に乗さつてきだつとお。地震だから、海、ざふりざふり揺れるんだつもやあ。さっぱり、野郎っこの舟、進まねえ。

そのうち、地震のやづあ、大きな熊手持つてきて、野郎っこの舟さ、がつんと掛けだつお。舟あ、見るまに引きよせられで、

へああ、どうにもなんねえ」と思つた時、出はつてくつ時にもらつた紙包みあつたのを思い出して、

へ母やんに『大事な時に開けろ』って語られた。なに入つてゐるんだがやあ」

つて、開げでみたんだと。

そうすたっけ、ヤスリ入^{へえ}っていたんだど。金物だの切んにいいヤスリだったんだど。

「ああ、ほんでえ、こいづで熊手の歯、擦^{こす}って切んべ」

って、一生懸命^{いっしよけんめ}になって擦^{こす}ったんだど。死に物狂いんなくて擦^{こす}ったんだど。

野郎^{やろ}っこは、「家さ帰^{けえ}んべ」として擦^{こす}る。地震のほうは、「われほうさ、舟、よせべ」として引^ひつ張^はる。両方でやってい^いるうちに、熊手の歯、ヤスリで切られて、野郎^{やろ}っこの舟あ、ど^どんどん陸^{おか}さ向^むかったんだど。

「やれやれ、助^{たす}かった」

って、陸^{おか}に上^あがったっけ、地震はあきらめねえで、なん^{なん}で^で追^おっか^かげで来^きんのだどやあ。

野郎^{やろ}っこは逃^にげた、逃^にげた。んだげんつも、地震は足速^{はえ}えから、まだの追^おっか^かれそうにな^なったんだど。んで、そばにあ^あった松の木さ登^{のぼ}ったんだど。その下に井戸あ^あったつお。そ^そご^ごさ、地震、追^おっか^かけてきて、井戸の中を見^みたれば、

野郎^{やろ}っこ、底の水に映^{うつ}ってあ^あったんだど。

「なんだ、このつ。そ^そごにい^いだなあ」

って語^{かた}ったんだど。

「よしよし」

松の木の上で、野郎^{やろ}っこ、舌、べろつと出^でして見^みせだっけ、地震のやつあ、怒^{おこ}って、

「この野郎^{やろ}、おれどごさ、舌出^でしてけ^けつ^つかったな」
って、い^いぎ^ぎなり井戸の中さ飛^とび込^こんだんだど。

そうすて、井戸さ入^{へえ}ったっけ、中は水だし、深^{ふか}くて上^うがらんね^ねぐな^なったどやあ。野郎^{やろ}っこは、それ見^みて、

「助^{たす}かった、助^{たす}かった」

って語^{かた}って、松の木から下^{くだ}りて、こ^こндаあ、井戸の中さ、大^おきな石^{いし}から、そ^そごら^らへんの土^{つち}からな^なにから、井戸が埋^うま^まる^るくれえ、ぶ^ぶっ込^こんでや^やったんだど。とうとう、地震のやつあ、井戸の中さ埋^うま^まって、出^でられな^なくな^なったんだど。

んで、い^いまでも揺^ゆれる地震はね、井戸の中^{ちゅう}の地震が外^{ぐわい}さ出^ではんべとして、も^もが^がい^いて^ている^るからなんだどやあ。

こんで えん^{えん}つこも^もつこ さ^さげだ

二. 福島のマンゼロク

話.. 煤原村男さん（大正八年生） 栗原市栗駒

出典.. みやぎ民話の会叢書 第十一集

『栗駒町猿飛来の伝承 煤原村男翁の唄と語り』

（二〇〇五年発行）

昔、あるとき、一人の若^わえ者^{もん}が山の道歩いてたど。疲れもあつて、ねむくなつてきたんで、

「ここらで、昼寝にすつぺ。」

つて万歳麓^{まんざいろくさん}山の岩場さあがって行つたど。畳二畳ほどの広さのどこで、若^わえ者^{もん}、寝すぐしてしまつたど。氣いついたら、お天とうさま西さ傾いてだのよ。若^わえ者^{もん}飛び起きて、山おりだのないん。

里さ来たれば、村の人達大さわぎしてだど。

「地震来て家つぶさっちゃ。」

つて言う人もいるし、道も地割れしているし、みんな震え止まんねでだど。村の人達から、

「お前^{めえ}、どこで地震にあつた？」

つて聞かれたげんと、若^わえ者^{もん}地震にあわねがったから返事に困ったのないん。そんで、

「俺^{まんざいろくさん}あ、万歳麓山でしばらく昼寝してだんだ。」

って言ったど。村の人達びつくりして、

「そんじゃ、万歳麓山まんざいろくさんって、地震の来ねえ山だ。」

ってことになっだのしゃあ。万歳麓山まんざいろくさんは福島はんだやまの半田山の陰

あたりにあった山だそうだいん。まんざいろくさんが「マ
ンゼロク」になった話だいん。

記録…庄司アイ

出典…『改訂増補 民話』やまもと民話の会編著

(二〇二〇年発行)

【津波】

三、白大丸・黒大丸しろだいまる くろだいまる

むかし、波路上はじかみ（いまの気仙沼市階上けせんぬましはしかみ）の港に、なかの
よい兄弟がいた。兄の名を白大丸しろだいまる、弟の名を黒大丸くろだいまるといっ
た。

ふたりは、まい日、朝はやく舟をこぎだし、夕がたには、
さかなや貝を舟いっぱいにつんで、かえってきたんだと。

家には、年とったおとっつあんとおかつつあんがいて、親
子四人、しあわせにくらしていた。

ところが、ある日のこと、海に日がおちても、白大丸しろだいまる、
黒大丸くろだいまるが、かえってこなかった。

おとっつあんとおかつつあんは、明戸浜あけどはまにでて、まっく
らな海にむかい、

「白大丸しろだいまる、はやくかえってこよう。

黒大丸くろだいまる、はやくかえってこよう。」

と、よんだと。

だが、夜が^よあけても、白大丸^{しろだいまる}、黒大丸^{くろだいまる}の舟は、もどつてこなかった。

その日一日じゅう、おとつつあんとおかつつあんは、浜に立っていたが、舟は、もどつてこなかった。

つぎの日も、そのつぎの日も、ふたりで海を見つめているうちに、とうとう一か月がすぎてしまった。

「あしたは、岩井崎^{いわいさき}のほうにいつてみるべ。」

ふたりは、岩井崎^{いわいさき}に立つようになったと。

きのうもきょうも、ただ、沖をながめてくらすおとつつあんとおかつつあんは、白髪がぼうぼうとなり、きものも、布つきれをひもでしぼりつけているという、すがたになつていったんだと。

こんなふたりのすがたを見て、明戸浜^{あけどはま}のものは、

「ああ、むごいこったなあ。」

「むすこふた리를、いっぺんに、海にとられてしまつてはなあ。」

と、いいあったんだと。

一年が、すぎた。

その日も、おとつつあんとおかつつあんは、岩井崎^{いわいさき}に立つて、沖を見つめていた。

とつぜん、ごおつと地ひびきがし、岬の岩いう岩が、ぐらぐらとゆれた。やがて、海の水が、どうつとひきはじめ、みるみるうちに、海の底があらわれ、沖のほうまで地つづきになったんだと。

おとつつあんとおかつつあんが、おろおろして立ちすくんでいると、沖のほうから、声がきこえてきた。

津波が　くるぞう

津波が　くるぞう

その声は、だんだん大きくなり、ごうごうとひびいて、村じゅうをかけめぐった。村人たちは、津波からのがれよ

うと、山にかけあがった。

だが、おとつつあんとおかつつあんは沖にむかって、くるったようにはしりだした。

しろ だい まる ー
くろ だい まる ー

さっきの声こそ、わすれもしない白大丸黒大丸の声だったからだ。
しろだいまるくろだいまる

ところが、いったんはひいていった波が、こんどは、おそろしいうなり声をあげてひきかえしてきた。そして、岩いわ井崎いさきもろとも、ふたりのをみこんでしまったと。

よく日、しずまった海に、大きなふたつの岩が、によつきりあらわれた。

ひとつは黒い岩で、もうひとつは白い岩だった。

だれいうともなく、この二つの岩を、白大丸、黒大丸だしろだいまるくろだいまるとよぶようになった。

また、そこからすこしはなれたところにも、ふたつの岩が、顔をだしていた。

そのふたつの岩は、まるで、子どもたちをかえしてくれと、天にむかつておがんでいるようなすがたをしていた。

「きつと、白大丸、黒大丸のおとつつあんとおかつつあんが、岩になったんだべ。」
しろだいまるくろだいまる

と、このふたつの岩を、はいてんいわ扨天岩とよぶようになったと。
あけどはま明戸浜のものは、海からかえってきて、このはいてんいわ扨天岩を見ると、ほっと心がなごんだものだった。

ところが、ある年のこと、大津波がきて、おとつつあん岩が、波におしたおされてしまったんだと。あとには、おかつつあん岩だけがのこされた。

このおとつつあん岩に、まえから目をつけていたのが、はじかみ波路上の長者だった。

長者は、しずんでしまったおとつつあん岩を、海からひきあげさせて、じぶんの屋敷にはこびこんだ。

屋敷にはこびこまれたおとつあん岩は、ひろい庭におかれ、長者は、まい日、それをながめては、

「ううん、まったくいい岩だ。」

と、ひとりでよろこんでいたと。

ところが、いつのころからか、夕ぐれどきになると、お

とつあん岩のあたりから、

「ばばあ、ばばあ。」

と、よぶ声が、きこえてくるようになった。

「おかつあん岩からひきはなしてきたんで、おとつあ

ん岩が、うらんでいるんだべ。」

と、きみわるがって、庭にちかよるものがいなくなっ

てしまった。

けれども、長者だけは、

「なあに、そのうちあきらめて、おとなしくなるべ。」

と、ほうっておいたんだと。

だが、「ばばあ、ばばあ。」と、よぶ声は、一日一日と大

きくなってくる。そして、とうとう、

「ばばあ、ばばあ。」

と、よびながら、のっしーん、のっしーんとうごくようにな

った。

さすがの長者も、きみがわるくなって、

「もとにもどしてやるか。」

と、おとつあん岩を、ふたたび、海にしずめてやったと。

だからいまでも、すがたは見えないが、おかつあん岩

のそばには、おとつあん岩が、よこたわっているんだと。

話… 畠山平作さん（明治三十六年生） 気仙沼市階上

村田喜膳さん（明治三十八年生） 気仙沼市本吉町

出典… 県別ふるさとの民話 40

『宮城県の民話』 児童文学者協会 編著

偕成社（一九八二年発行）

四・末の松山 波越さじとは

多賀城の八幡やわたはこのあたりでも大きな集落で、上千軒かみ、下千軒しもって言われるくらい家が建っていてね、大きい町だったんだよ。

そこに鏡が池って池があって、そのそばに茶屋あったんだって。今でいう飲み屋ね。

そこへ八幡やわたの若い衆だの、みんな飲みにいっていたんだと。

その茶屋に、こさじさんってきれいな娘さんがいてね、お酒出したりして働いていたから、みんなその娘さん目当てだったんだと。

ところが、この茶屋さ、頼つかぶりした猩しょうじよう々が来るんだと。金も持たないで来るんだと。

だけんども、こさじさんはやさしい娘だったから、悪い顔をしねえで、あまった酒飲ませたり、ときには、小遣いくれてやったりしてたんだと。

それ見て、おもしろくねえのは土地の若い衆だったのじゃ。やきもち焼いて、

「いつか、あいつ、殺さなくてねえ」

って、相談したんだと。

それを聞いたこさじさんは、猩しょうじよう々に言ったんだと。

「あんだ、ここさ来ては駄目だよ。殺されるから、来ては駄目だよ」

したら、その猩しょうじよう々が、うれしかったんだべな、こさじさんさ教えたんだと。

「何月何日に、ここさ大きな津波来て、みんな流される。おまえは、あそこの末の松山さ逃げろよ。きっとだよ」

そうして、ほんとに、その日になったら、大きな津波が来たんだと。

みんなみんな、どっと流されたけど、こさじさんは、教えられたように末の松山さ逃げて助かったんだと。

八幡やわた千軒の町もみんな流れて、今の利府のほうへ、流れていったんだと。

そこで、利府には八幡^{やわた}って町がいまでもあるんだって。

流れていった八幡^{やわた}の町がそこにまたできたんだね。

多賀城の末の松山は、ずっとそこにあって、津波が来るたびに、この話、思い出すね。

こさじさんが逃げて助かったこの末の松山のことは歌になって詠まれているんだと。

契りきな かたみに袖をしぼりつつ

末の松山 波越さじとは

波越さじとは……って言うのは、「こさじさん」のこと
だべかね。

話…関山ちよさん（大正六年生） 多賀城市八幡

記録…小野和子

この話は、二〇二〇年にせんだいメディアテークで行われた展示「2011・3・11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《い
いつたえ、むかしばなし、はなし》その8「多賀城市周辺の浜の民話」
十話のうちの一話です。

五. 三陸の大津波

三陸の大津波は石巻村であったのが石巻市に変わったときだったの。そすて、うちの大きい娘、石巻で持ったんだから、四十五年前（昭和八年）にねえ。

そいで生まれて十四日目にねえ、ちょうど三日、三月三日でお節句の日であったの。

で、私たつ、石巻でいたからねえ、なんだか、津波だあって、津波だあってねえ、川下から川上さ、その頃多分下駄はいってたら、ガラガラ、ガラガラって音すんの、逃げる音。

私ねえ、おやじさん、体悪くて入院してあつときだから、旦那さん一人置いて逃げるわけにいかないから、赤ん坊抱いておしめを持って、二階だから階段降りたり、またあがつていったりねえ。この二階まで水上がるまでに下の人たちも流されっぺとかけてねえ。動かねえのね、うちのおやじさん、若いときだから。

そすてるうつに、いくらか川ぶちに水が入ってきてあつ

けどもねえ、石巻の町まではあがらなかったのねえ。

そのときはねえ、雄勝の方はやられたのねえ。雄勝学校の運動場まで大っきな大型船が入ってねえ、引き波で学校の運動場さあがったきりねえ、船そのままであったの。それからなんか流れたのが木のずっと上さひっかかってねえ。

人も、あら浜つてとこあんのねえ、雄勝町のあらつてとこ。その人はねえ、村中死んだの。ずっと昔ねえ、津波にあった人たちだけが高いところに家建てたっらしいのね。その人たちだけが残ってみな死んだんだと。

八人家族みな死んで、その家、有名な大きい家だけがアメリカまで流れたとゆわれたの。

別のうちでねえ、女の子が、六つばになる女の子が、母ちゃん、赤い服買ったの着せて、着せてって、その晩とってもせがむから、なんだべ今夜に限って着せろ着せろってゆうと思ってねえ。

そすたら髪結って、おさげに結って、ほしてリボンかけ

てかけてって責めんだと、六つの女の子がねえ。

そすて、こんなに責めるものを、不思議なこと、この童わらわつて、そすてリボンをちゃんとかけたらば、お白粉と紅こつけてけろってきかねえんだと。

なんだべ、今夜この子ども。気でも狂ったように変なことばりゆうってねえ、つけて、

「ああ、かわいい、かわいい」

ってゆったらねえ、脱ぎたくねえとてその支度のまんまで寝たんだと。そうすたら、そのまんま死んで浮いてたんだと。

その子のおっ母さんはお産して四十日めくらいであったと。暗いうちの中でねえ、赤ん坊抱いて浮いてて、そすてねえ、赤ちゃんが死んだとき、ビャーッと音してそれきつきりだったと。したら、助けてえ、助けてけろって声、家の底ですっから、死んだ赤ん坊はなして、くぐっていったんだと。そすてねえ、手届かねえから足でグツとねえ、布団を引っばったら、妹がすぽっと浮いてきたと。

「あら、姉ちゃん大丈夫か、お産した身体だから大丈夫か」
って、姉さまの^{あね}ところ、こんど抱いて、どんなことしたか、
屋根を抜いて、頭出して見たらねえ、じき隣のうちが自分
のうちの脇さ流れてきて、その屋根へねえ、隣りのお父さ
んもなにも、またいで馬乗りに乗ってあったと。

そすて、あーって声をかけたれば、あー、みんな達者か、
うん、今姉ちゃんのとこ助けてえと思って、って、死にも
のぐるいで頭で板はいでねえ、姉さまとこまず屋根の上あ
げて、姉さまをぎっちり抱いたんだと、妹が。

見たらねえ、さっき頭だけ出したとき、自分のうちとぶ
つかっていたのに、姉さまとこ出して自分が屋根さあがっ
てみたら、その隣の家がねえ、ずっと果てしねえ方まで流
されていったと、潮にとられて。自分の家は家大きいた
めだかなんだか、動かねえでそこに落ち着いていたんだねえ。
そすたら、助け舟がきて、その舟に助けられて、姉ちゃ
んとこ助けてけらい、あつたためてけろ、って、炭ガンガン
おこして木どんどん焚いてあつたためて、そうすたらねえ、

お産した身体だから、どこかしこ、みんなボツ、ボツ
と血のあと、ちぎったようにねえ、あざのようになった
て、身体中が。どうすつかと思ったら、自然と治った
てねえ。

で、子どもは一人残らずみな死んだんだと。本家別家、
お父さんからお母さんから家族みな死んで、新しい位牌を
並べて御飯食べようと思って座って、涙ばかり出て、わ
あわあ泣いたと。

話…岩崎としゑさん（明治四十年生） 牡鹿郡女川町

出典…民話の手帖別冊

『宮城県 女川・雄勝の民話―岩崎としゑの語り―』

松谷みよ子編著

日本民話の会（一九八二年発行）

【飢饉】

六. おはつとわらし

昔のことだっけ。まあ、天保のころだいかねえ。とって
も飢饉^{がす}の年だったんだとしや。まず、二年も三年も飢饉^{がす}続
いた時の話だったのねえ。飢饉^{がす}ってえと、田んぼのものは
りでなく、山も飢饉^{がす}なのっしや。取れねえときはなあんも
とれねえ、田んぼも畑も山も。

そんなとき、箒畑^{ほうきはたけ}のずうつと山奥^{おなご}にね、お初^{はつ}つつう女^{おなご}の人、
亭主^{ていしゅ}さまと、まだべえっけな（とても小さい）わらしと、
三人で暮らしてたんだと。毎年飢饉^{がす}が続くもんだから、海
のものも山のものも、みな獲り尽くし掘り尽くして、なん
にも食うもの無^ねくなった。ほんで、亭主^{ていしゅ}さま、
「ここに居^{がす}たって、とても飢饉^{がす}でわがんねえ。おれ、出稼^{でせ}
ぎして金取^{めえ}ってくつから。お前^{めえ}、ここで待^{まち}つてろ。なんとか、
わらしといっしょに待^{まち}つててけろ」

って、お初^{はつ}さ語^ごつて、出^ではっていつてしまった。

お初^{はつ}、亭主^{ていしゅ}さまの話^{はなし}、ほにして（本^{ほん}氣^きにして）しや。毎
日毎日、わらし背負^{しよ}つて手間取^{てま}りしたり、山^{やま}さ行^いつて芋掘^{いもほ}つ
たり、木の皮^{かわ}まで剥^むいで食^くったけども、なかなか亭主^{ていしゅ}さ
ま戻^{もど}らねえし、いつまでも飢饉^{がす}続^つくよでしや。なんとも、
精^{せい}も根^ねもつきはてたんだべねえ。

あつとき、おはつ、わらし背負^{しよ}つてたっけ。わらしも、
腹^{はら}減^へつて腹^{はら}減^へつて、泣^なき疲^{つか}れて寝^ねいつてしまった。お初^{はつ}の
肩^{かた}の上^{うへ}から、だらんと手^てえ下^{くだ}げて。お初^{はつ}の母^{はは}さまも、腹^{はら}減^へつ
て腹^{はら}減^へつて、わがんなくてしや。ひよつと見た^みっけ、わら
しの手^て、白い手^て下が^{さが}つてゐるの、大根^{だいこん}だと見た^みつた。白い
大根^{だいこん}と見た^みたっけ、思^{おも}わず知^しらず、わらしの手^てさ咬^くぶつ
た。がつつり咬^くぶつたっけ、わらし痛^{いた}えから泣^ないたおね。
火^ひいついたよに。わらし泣^なき叫^{さか}んだっけ、お初^{はつ}ふつと目^め
覚^さめたれば、目の前^{まへ}のわしの手^て、食^くったぎつとこだった
て。

それから、お初^{はつ}とわらしの姿^{すがた}、どこにも見^みつけらんなく

なっただと。いまでも、箒畑の山奥に、お初が住んだ家跡だってとこあってしゃ、お初屋敷とか、初沢って、呼ばれてんだおね。

話…山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典…みやぎ民話の会叢書第十二集

『南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』

（二〇〇九年発行）

七. 膳ぜんの湯ゆ

むかしね、飢き僅さんつづいたときにね、餓が死し者しゃがたくさんで
だっつんだ。ここもそのとおりで、死し人にんがでて空屋あきやになっ
たんだと。

そのうちこの弘川はらいかわでね、どいの家だかわかんねげんと、
一人の旅人がきたんだと。

そうしたところが、ちょうどお昼時で、そばつくって食
べてだと。旅の人に、

「あんた、どっからきたいん」「馬籠まごめからきたんだ」

「どこも不作ふさくでこれ、あんたも腹はらへってきたべ。おらいで
なにもできねけど、今、そば食ってたから、ひとつつ食べ
ていがんせ」

そば、ごつつおう（ご馳走）になつてね、これがら、とな
り村に峠をこえて行くんだったと。

「いっつおさま」

っていったんだと。その人、いそいでたんだか、お湯もつ

てこねうち、自分で水のんだと。そして、

「ごつつおうさん」

と、かだつて行つたんだそうだと。

あたりは右も左もかや、雑木林もずつつづいててね、その人は、峠をのぼつて、きゆうな坂くだつて行つたわけだ。三尺ぐれえのせまい道をよつぽどさがつていったら、むこうからね、のぼつてきた人あつたんだと。米谷まいやのほうからきたか、入谷いりやのほうからきたか、鎌もつてあがつてきた。ちようど行きあつてからに、

「やつ、どっちからきたのや」

「馬籠ましろめとおつてきて、弘川によつて、弘川の物持ちの家でや、そば、ごつつおになつてきた。おかげさまで、坂も苦労なく、こえぐもなくのぼつてこらつた、おかげさまで」

「おめや、その家でそばごつつおになつて、お湯のんできたがや、水のんできたがや」

「おれ、いそいでたから、お湯でなく、水のんできたや」

「なに、水のんできたつて」

鎌もつた人、すっかり形相かわつてや、鎌できりかけて、その人をころして腹さいて、食つてきたばかりのそば、腹からだして食べたんだと。

そばつていうのは水でひたすと、形、かわんねんだね。お湯のんだら、腹の中でとけてるから、腹さいても食べられないわけだ。水のんだから、ころされてしまった。

話…山内泰助さん（明治四十三年生）本吉郡南三陸町

出典…宮城県文化財調査報告書第一三〇集

『宮城県の民話 ―民話伝承調査報告書―』

宮城県教育委員会（一九八八年発行）

八、騒がしいしし頭かつしや

あつとき飢饉がすの年あつて、

「今年は飢饉がすだから、お祭り休むべっちゃやあ」

って、休んだっけが、飢饉がす三年続いてしや。三年お祭りあげねえでしまったっつの。

ほうしたれば、八幡さまの法印さん万福院つつんだが、万福院のデイ（奥座敷ようま）で夜間、ガツタガタ、ガツタガタって足踏みして、しし頭かつしやの鳴る音すんだつつんだねえ。

ほんで家中いながの人たち、おっがなくておっがなくて、とってもわがねえんで、拜んでもらったって。したっけ、いつまでもお祭りしねえから、しし頭かつしやがお祭りやりだくてやりだくて、わけえわがねえくて。ほだから、夜一人出はつて、踊ってんだあつて。そゆふに出た。

ほんでえ、みなして、

「神さまそんなに『お祭りやれ』つつんだもの。たとえこれ、糧かてめし飯食めしったってやるべっちゃやあ」

って言って、お祭り出したっけ、その年たいへんな豊作になったんだとしや。

おら方で、八鹿踊やつしかおどりの鹿頭しかつしやも、打囃子の獅子頭しかつしやも、「ししかつしや」、「ししかつしや」って語るんだね。デイで踊ってたんがどっちなもんだか、ほいつはわがねえのしやね。

話…山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典…みやぎ民話の会叢書第十二集

『南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』

（二〇〇九年発行）

【疫病】

九、どすになった娘と猫

むがしなす、ある一軒の家あったづんすおや。

そこの家に、とってもめげえくして（かわいらしくて）、それから、やさしい女おなごの人だったんだどす。だれさでも如才じようさいなくてなすあ、ほんとに面倒見いい人だったんだどす。

ところがなすあ、ある時とき、旅人が来たんだどす。乞食こじきみでな者だからって、家の人だちはうんといやがったんだどす。茶碗の欠けたのに御飯なんか盛って食かせるの、女おなごの人なす、やんたがった（いやがった）んだどす。それで、ちゃんとした茶碗で食かせたりなんかしたんだづおんなす。

したつけ、そのあとで、女おなごの人、病んでどす。（ハンセン病）になったんだどすや。どすになってなすあ、鼻っこ欠げだりなんかするようになったもんだから、木小屋みでなもの作ってもらってす、そごさ入れられでいだんだどす。

そして、痛いでがすぺ。膿うみっこも出るんだすぺ。そいづなす、かわいがってた猫が、ズワリズワリってなめでくれるから、痛いでくねんだづもなす。

そのうちに、うんと悪くなって、とうとう死んだんだどす。葬式出すべと思っても、病気がどすだから、だれもかつぐ人もねんだづおなす。

和尚さんも頼んできたけども、やんたがったんだおなす。それで、ろくなお経も上げ申さねんだおすや。そして、いよいよってゆう時とき、やんたがる下働きの人だちをせかせて、棺をかつがせようとしたらば、にわかになんか曇曇ってき たったづんすおや。そして、ポオーツと飛び出して来たったもんあったんだどす。見たら、女おなごの人がめんこがってた猫だったんだどすや。

その猫はなあ、そごさ集まってた和尚だの、その家の人たちだの、ギーツとにらみつけで、ぐりぐりって棺桶ばくわえてなすあ、舞い上がったんだどす。

「たいへんだ。どごさ行ったべ」

って、さわいだどごろ、その棺桶が地蔵平じそうびらの不動岩ふどういわのそこ

ろさおいてあったんだどすや。棺桶を運んだのが猫だったんだどす。その猫も棺桶のそばで死んでだったどす。

おなご女の人、どすになったからってゆっても、猫だけは情なさけを

忘れないで、いい加減なことされるのくやしくて、棺桶、持ち上げて行っただどす。

そごで、猫もいっしょに、お葬とむらいばしてやったんだどすや。

どんとはれ。

話..佐々木健さん(昭和十二年生)宮城郡利府町

出典..『佐々木健の語りによる 遠野郷宮守村の

昔ばなし』世界民話博実行委員会

(一九九二年発行)

【水害】

十. 川面土手の人柱かわづい

いりや入谷から行って、まいや米谷大橋渡るとしや、北上川の西側に、弓なりに回ってる土手あんのね。あたりの人、川面土手かわづらでいてつての。その中ごろの河原に、この土手の人柱になったつつ、下女ツコ祀ったお宮あんだてば。お鶴明神ってんだね。

あそこ、むがしは今みてえな、立派な堤防でねえからしや。毎年流さえて流さえて、北上川から、いつも水増しあったつつのね。ほんで、たびたび土手の普請あつてしや、あたりの人たちひ、それで困りはててたつて。

土手普請してて、みなで一服してるとき、ある人、

「やあ、こゆふに、土手の破れて困ったとき、人柱立てつとしや、土手ツつの、丈夫なるもんだつつけなあ」

って語ったつつの。そしたつけ、

「ほんじゃ、だれとご、埋めっぺやあ」

って話になってしまった。けれども、あたりほとりの人たち、顔見知りだし、「だれそれいい」「かれそれいい」って言っただって、とっても、だれ埋めよつこと出来ねえ。

したら、その肝煎りの家さ、黄海から来た、お鶴っていう手間取りの下女ツコ居でしゃ。その下女ツコ、毎日、旦那さんの弁当持たしえられて、土手さ通って来つたのねえ。

「あの姉ツコ、よそ者だからやあ、あいつ入れろや」

「ほんじゃ、そのことにすっぺ」

って、話決まったお。

みなして、穴深く掘ってかに、足場板、穴さ渡した。待ってたつけ、その姉ツコ、弁当持って、

「おら家の旦那さん、どこさ居たべ」

って、川面土手んとこさ来たって。

「ああ、お前の旦那さんなら、あすこに居たから、ここ渡って行げやあ。危ねえから、氣いつけて行げなあ」

って、穴に渡した足場板渡らせた。姉ツコ、「おっがねおっがね」って、ほうほうと渡ってって、ちょうど半ばまできたときしゃ、その足場板、横にぼんっと蹴っ飛ばした。するっと横になって、すぽっと落ったつたの。で、「それっ」つんで埋めたんだてば。可哀想にしゃ。

それからってもの、川面土手、大嵐きても流さいたことねえんだとしゃ。ほんだけつど、明治になってから、あの土手の一番上まで、たぶたと川の水上がったことあつた。いまいま土手超えつとごして、たらたらと漏れ出したときあつたつた。

ほんで、これ大変だつたんで、あたりの人たち、みなして丸太木担いできてしゃ。土手さ並んで、その木で土手え突いたつたの。埋めた姉ツコの名あ唱えながら、

お鶴さま お鶴さま

助けてたもれ 助けてたもれ

って、ドツドツ、ドツドツ、土手突いたんだてば。そうしたつけね、たぶたとぶたと水上がってたの、ぴたっと止まっ

て、だんだんだんだんと水下がったんだとしゃ。そしてとうとう、川面土手、破れねえでしまったって。

そって、埋めらえた姉ツコのこと、

「なに、可哀想なことした。ただ埋めつぱなしでわがんねえ。ここさ供養碑建てて、みなして拝むべ」

って、土手の内側に供養碑建てて、周りに桜だの杉だの植えてしゃ、いまもお鶴明神って、お宮になってあんだおね。

話…山内郁さん（昭和四年生）本吉郡南三陸町

出典…みやぎ民話の会叢書第十二集

『南三陸町入谷の伝承 山内郁翁のむかしかたり』

（二〇〇九年発行）

十一・橋かけ鬼六 おにろく

むがすむがす、ずうつとむがす。

とつても腕のいい大工でえくがあつたんだと。

その村の川の流れが速くて速くてね、だれもその川に橋かける者なかったんだと。それで、その大工でえくが橋かけるように、たのまれたんだと。

ところが、その大工でえくも、そいふな川に橋をかけるには、なじよすべやと考えて、

「とにかく現場見ねけりゃ」

と、その川を見にいったんだと。

あんまり川の流れが速いんで思案にあまって、ぽかーつとつつ立ってたんだと。

そしたれば、石にさわってぶち上げ、石にさわってぶち上げる水の波がくだけで、そこから鬼があらわれてきたつつんだねえ。

「これこれ。大工^{でえく}、なにしてたや」

鬼が、ことばかけてきたんだと。

「ここさ橋かけるように言われたんだけっども、とてもこの流れでは橋かけられねえって、思案してたどこだ」

って、大工^{でえく}が答えたら、鬼がね、

「ようしつ。ほで、おれ、かけて呉^ける」

「ほんとかやあ。なんぼ鬼の力だっても、この流れに橋かけられるかやあ」

「いや。かける。そのかわり、橋かけたら、おまえの目ん玉^{めたま}もうぞ。そして、おれ、橋かけるまでに、おれの名前あてたら、おれの負けだから、そのときは目ん玉とらねえ」
って、こう約束したんだと。

大工^{でえく}は、そんなことできるはずねえと思って、まず、その日は家^えさ帰ったんだと。

そして、つぎの朝来てみたれば、もう半分橋かかってたと。

「いやっ。やっぱり鬼だわ。これは、橋かけるかもしやねえ

わ。埒^{らっ}もねえことになってしまったなあ」

と思つてね、目ん玉とられるのもひどいし、

「なじよすんべやあ」

って、がっくりして家さ帰ったんだと。

つぎの日また来てみたれば、ちゃんとりっぱに橋かかって
だったんだと。

「ああ、これはりっぱに橋かかった。鬼め、約束だから、
おれの眼玉^{まなぐだま}抜きにくるんでねえべか」

ってね、大工^{でえく}、わらわらと逃げた、逃げた。山里走って、山
越えて、逃げた、逃げた。

そしたらば、山二ツ越したところで、童^{わらし}たちいてね、

鬼六^{おにろく} 目ん玉とって

きようは 帰ってくる

鬼六^{おにろく} 目ん玉とって

はやく こーい

って歌っているんだと。歌ってるのは鬼の童^{わらし}たちだったと。

その歌、よく聞いて、

「鬼の名前は鬼六おにろくだな」

大工は思でえくって、

「わかった、わかった。ほで、なにも逃げて走ってあるくことねえちゃや」

うんと安心して山からもどってきたんだと。

うれしいような顔されないから、心配しんぺえ顔してね、橋のそばさもどってきて、腰おろしていたんだと。

そしたれば、やっぱり鬼来て、

「眼玉まなぐだま、抜きさ来たぞっ」

って叫さかぶから、

「待ってろ。いま、お前の名前あてるから、待ってろ」

って言まなぐだまって、すぐあてては悪いから、

「ずん六だべ」

「でん六だべ」

って、でたらめ言うそってたんだと。

「ほでねえ。ほでねえ。そいつも嘘だ。こいつも嘘だ。やっ

ぱり、おまえの眼玉まなぐだまもらうからな。あはっはっはっはっ

はっ」

鬼、うんと馬鹿ばかにして笑うから、さいごに、

「鬼六おにろくだあっ」

って叫さかんだと。

そしたら、鬼はたまげてね、泡ぶくといっしょに流れていってしまったんだと。

それで、大工は眼玉まなぐだま抜かれないで、橋だけはりっぱにかかったっていうことです。

よんつこもんつこ さけた

話…佐藤玲子さん（昭和六年生）栗原市一迫

出典…みやぎ民話の会叢書第六集

『栗駒山南山麓の昔語り むがす

むがす ずうっとむがす』

（一九九八年発行）

【干魃】

十二、天から落ちた雷小僧

ここのね、いなりやま稲荷山の後ろに大きな堤あって、その向い側に、むかし延寿寺えんじゅうじっていうお寺があったのね、いまないけども。その寺で寺男やすけをしておる弥助やすけじいさんて、おじいさんがあったんだ。

その人が、寺の用で角田に行った。で帰る途中に、たいしたお雷れさま雨あめになったんだね。そうして、二本木にほんぎっていうところの、大きな木の下に雨宿りした。ほいて雨あがって帰ろうとしたら、その木の下に、かわいい小僧がおったってんですね。ほいでじいさんは、小僧を連れできたった、ほの延寿寺に。そして寺の小僧として可愛がっておったって。小僧もまめまめしく働いて、小僧として勤めておったと。

ところがある晩、弥助じいさんは、小僧が寝間には見えないのを、ひよつとのぞいて気がついた。どこだろうって、あちこちさがしてみると、お寺の本堂の須弥壇の上に寝ておって、そこから後光が射しておったと。「これはたいへんだ」というので、和尚おしよさんに言った。和尚おしよさんはびっくりして見ると、須弥壇の上で寝ておる。

そこで次の日になって、和尚おしよは小僧を呼ばって、「おまえはなんだい。小僧でありながら、大事な本堂の須弥壇の上で寝てるとは」

と、まあ叱りつけようとしたんだね。

ところが、その小僧はこんど開き直って、

「おれは、この前のお雷れさま雨あめとき、雲を踏み外して、天から落ちた雷だ。いまは、天に昇れなくて、小僧の姿になって、お前めえのうちにいるんだ」

と。はあ、和尚おしよさんびっくりした。

「んだらば、どうしたらば、あなたを天に戻すことができるか」

って、聞いたところが、

「稻荷山に、柴木千駄せんだん、割木千駄せんだんを集めて、火をつけてくれ。

そうしたら、その火が燃える煙に乗って、おれは天に昇るだろう」

と。で和尚おしよさんは、村人を集めて、

「さあ、たいへんだ。小僧さんだと思ったら雷さんだ。雷さんを、天に昇らせなくてねえから」

と、みんなで柴を刈り薪を伐った。その山が、いま千駄山せんだんというんだね。

そうしてから、

「さあ、今日は、雷さまが天に昇るんだから」

って、村人みんなが稻荷山に集まった。火をつけて煙がもんもん出て、今にも昇ろうとするときに、雷小僧は、

「たいへん世話になった。これから三年過ぎと、このあたりは日照りで米が一粒もとれない。そのときに、これを祀って雨乞いしなさい」

といって、竜頭たつがしらって宝物をね、置いてった。

そうして、昇る煙に乗って、雷小僧は雷神に姿を変えて、天の方にどんどん昇ってったと。みんなは驚いて拜んでおったと。

それから、やっぱり三年たって、この辺一帯は日照りになる、米がとれない、この辺一の大きな堤も、みな干上がった、堤の中歩けだって。んだからやっぱり、「雨乞いをしなくてねえ」となってね。そこで小僧さんの言いつけ、雷さんの言いつけ通り、みなで雨乞いをした、置いてった宝物を祀ってね。その最後の日に、とんでもない雨が降った、いままで降らなかった雨が、そのときにざーっと。

そのことがもとなになって、「金津で雨乞いをしなければ、雨が降らない」と、これがむかしからの言い伝えになった。

おれの覚えある近いころでも、おれが小学校三年生だったころでもね、全然雨が降らない日照りで、この大きな堤もみな干上がった。そこで、雷さま昇ったところで、こんどは八大龍王祀って、八龍壇と名前を付けて雨乞いしたの

ね。

ふもとに下りてたお堂を、みんなで「よいしょ、よいしょ」と担いでね、あの堤の真ん中まで、ずーっと登って担ぎ上げたんだよ。毎日毎日、暑いのにね、笠をかぶって、蓑を着て。高い木に櫓を作ってね、そこで拝んでたおじいさんが、むかし雷小僧を拾ったっていう弥助じいさんの子孫なの。その人を先頭に立てて、

あーめえ、たーもれ、雷神よおー

あーめえ、たーもれ、雷神よおー

って、触れまわるの。それこんど、毎日毎日、一週間も、声をからしてやって。やっぱり必死なんだ、神さんにすぎるほかねんだからね。

すると、やっぱり必ず降ったんだね。「ほら、金津で雨乞いしたから」って言って。降ったんですよ。おれ、そういう事実を知ってるんだから。

その神さまは、いままだそっくりそのままだね。

話…高橋市雄さん（明治四十二年生）角田市小山

みやぎ民話の会資料集 No. 19

『角田市の語り』（一九八六年十二月発行）より

－「民話 声の図書室」 DVD・CD のご紹介－

「民話声の図書室」とは、「みやぎ民話の会」が1975年頃から記録してきた、宮城県を中心とする民話語りの映像・音声を、せんだいメディアテークと協働し、だれもが活かせる共有財産として、未来へ受け渡していこうとする活動です。これまでに、語りの音声CDが18タイトル、11名の伝承の語り手による民話語りのDVDが34タイトル完成しています。



『伊藤正子・佐々木健・引地田路子の語り [1]』



『亶理郡山元町の庄司アイの語り [1]』

2f 映像・音響ライブラリーで閲覧・貸出ができます

－ DVD －

- 登米市南方町の永浦誠喜の語り [1]-[3]
- 栗原市一迫町の佐藤玲子の語り [1]-[2]
- 遠野市宮守町の佐々木 健の語り [1]-[2]
- 登米市迫町の伊藤正子の語り [1]-[3]
- 黒川郡大和町の曾根つき子の語り [1]-[4]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫・松崎せつ子の語り [1]-[3]
- 伊具郡丸森町の佐藤秀夫の語り [1]
- 亶理郡山元町の庄司アイの語り [1]-[4]
- 加美郡加美町の引地田路子の語り [1]-[2]
- 伊藤正子・佐々木健の語り [1]-[4]
- 大崎市鳴子鬼首の大場重代の語り [1]-[2]
- 塩竈市浦戸寒風沢の土見壽郎の語り [1]-[2]
- 伊藤正子・佐々木健・引地田路子の語り [1]-[2]

－ CD －

- 登米市迫町の伊藤正子の語り [1]-[6]
- 遠野市宮守町の佐々木 健の語り [1]-[12]